

【全体概要】

県内で栽培されている飼料用米品種は、収量が不安定で稔実性が劣り、主要病害である縞葉枯病に抵抗性を有していない。一方、本県育成の「愛知125号」は、収量性が高く稔実が良好であり、縞葉枯病抵抗性を有する。そこで、高品質の飼料用米を安定供給し畜産農家の評価を高めて本品種を普及させるとともに、相対取引の結びつきを強化して地場流通におけるブランド化を図る。

新品種・新技術等の概要

- 穂長が非常に長く、収量は「あいちのかおりSBL」より2割程度多い。さらに、多肥栽培すると収量は増加する。
- 縞葉枯病、白葉枯病に抵抗性。
- 紋枯病に対しては「やや強」と推察（一般栽培品種は「弱～やや弱」がほとんど）。
- 農業総合試験場が「名古屋コーチン」を対象に実施した試験結果では、嗜好性に問題なく、給餌期間等に留意すれば肉質等に影響なしとの結果を得ている。

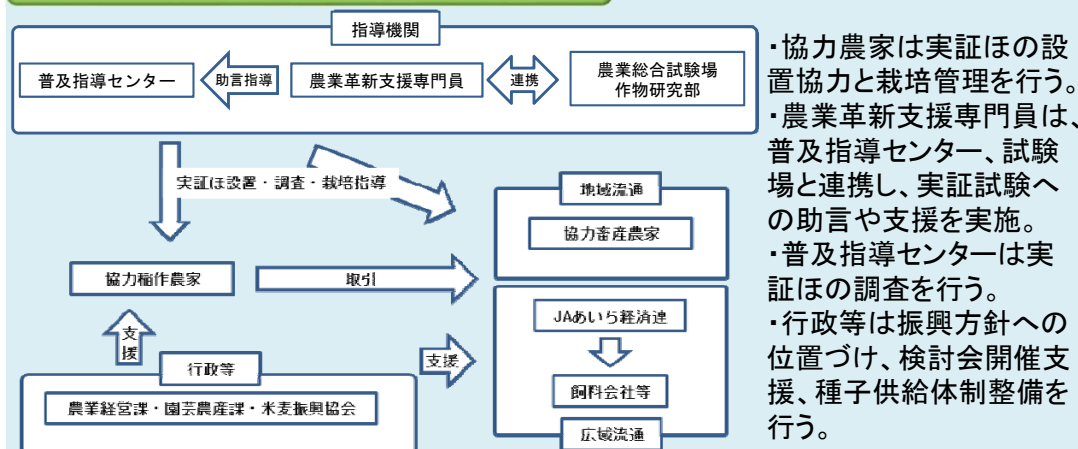


愛知125号

主な取組内容

- 県内6地域で、農業総合試験場作成の栽培法を検証する実証栽培の実施(4月-11月)
- 飼料用米生産地域に対する実証結果の説明(3月)
- 栽培技術マニュアル案の作成(3月)
- 飼料米利用養鶏農家等の聞き取りによる意向調査の実施(12月)

コンソーシアム候補の体制図



- ・協力農家は実証ほの設置協力と栽培管理を行う。
- ・農業革新支援専門員は、普及指導センター、試験場と連携し、実証試験への助言や支援を実施。
- ・普及指導センターは実証ほの調査を行う。
- ・行政等は振興方針への位置づけ、検討会開催支援、種子供給体制整備を行う。

課題と今後の対応

【実証結果の概要】

○全ての実証ほ場で、飼料用米に対する交付金単価の上限となる収量(地域収量+150kg/10a)が得られた。

○生育状況に合わせて、複数回にわたる追肥作業を行ったほ場があった。また、収穫が遅いほ場で、脱粒による減収が認められた。

【今後の対応】

○平成29年度の結果を受け、施肥量や収穫時期等の改良を行い、マニュアルに取りまとめる。

○行政等やJAあいち経済連と協同で、関係機関を集めた情報交換会を開催し、コンソーシアム候補を形成する。